

VI 早生広葉樹等の育苗及び植栽技術に係る実証試験

(実施期間：平成 29 年度～33 年度 予算区分：県単 担当：池本省吾)

1 目的

近年、里山の放置による竹林拡大や耕作放棄地の増加など、中山間地域における土地利用の低下が進行している中、植栽から 15～30 年程度で収穫できる「早生樹」は、里山・耕作放棄地の有効利用に繋がる可能性がある。そこで、早生樹を利用した回転が速い短伐期林業の技術開発及び育林技術の体系化を図る。

2 実施概要

(1) 方法

センダンのコンテナ苗を育苗中に発生する幹の湾曲を防止するため（湾曲がひどいものは出荷されず廃棄）、苗木の設置密度（5～35 本/トレイ。以下本数で表示）を変えて育苗した。

また、昨年度設けた県内 5 カ所の植栽試験地について、植栽木の成長及び病虫害等の発生状況を継続調査した。

(2) 結果

苗木の成長は、コンテナの設置密度が増加するほど大きくなる傾向がみられた。一方、苗木の湾曲は、設置密度が増加するほど低下する傾向がみられたが、慣行の 35 本で再び上昇した（図 1）。このことから、センダンは苗が伸長する上部の空間が広いと真っ直ぐ伸びず、また空間が狭すぎると隣接する苗とすぐに接触し真っ直ぐ伸長できないと考えられた。以上の結果から、センダンをコンテナで育苗する場合 1 トレイに 18 本設置（前後左右 1 マス開ける）して育苗するのが適当と考えられた。

植栽木の 2 年目の苗高の平均は、試験地により大きくばらついた（59.5cm～225.0cm）。標高 480m の日南試験地では雪害（幹折れ）と寒害（梢端の枯れ下がり現象）が多数発生し、標高 200m の大山町羽田井試験地でも寒害による成長不良がみられたことから、センダンを寒冷な積雪地に植栽するのはリスクがあると考えられた。また大山町羽田井試験地と標高 60m の鳥取市河原試験地では獣害（シカによる剥皮害、イノシシによる掘り返し）による成長不良がみられたことから、獣類が出没する地域ではネットなどの獣害対策が必須と考えられた。

3 結果の図表と研究の様子

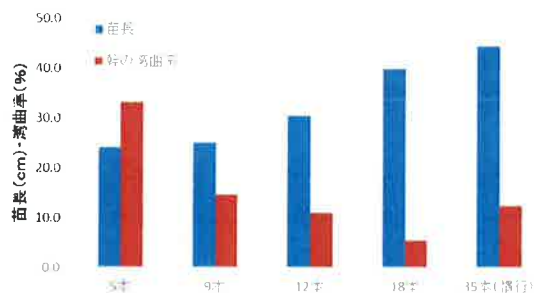


図 1 コンテナ苗木設置密度と成長・湾曲率の関係

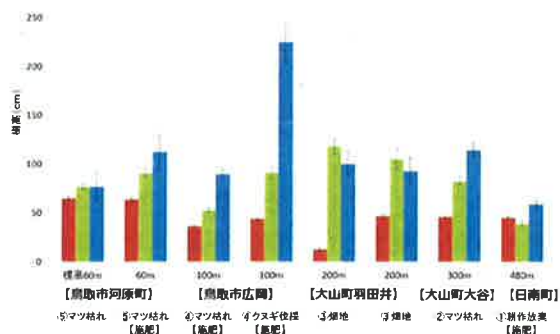


図 2 センダン植栽試験地の成長